熱海温泉圖彙

完

Y1354
5
史料館

自叙

腕乃痛の長壽痛とういへ場も老の足のぬ
ぬ乃来なく灸仲小田病のうち身もあ
ま乃ず熱ぞ海の磯乃音年少る温泉と
浴せんとて盆前の蚊やまた入ぬいぶ見
ぬ男児よまゝ孫書れをの子乃ちぶ角数
なく京水戎俳ひ七夕もきぬくの浪殺
見帰ぞ柳の柳町よ近き京橋城農

三井寄贈本4273

豆小田原まで五里二町の宿長崎坂こえ川を延
り横ぐぐ雨も逢ずこの外郎のお登りを
さらば右の方とらふを左へ曲りて熱海
の湯へよりこうもの山駕籠舁おろく
桃尻を乗早川村も静よ越て石橋山
乃星存夜も昼もなくば米噛村よ飯寄
茶屋なく根府川小脇ひとを振るさ色ゝ
おりしまもあるぐ所の雪吹の山越よ息

杖を憐ゝ蜀山の羊腸登りて江
の浦の眺望海面はめく赤澤山よ角力のやうな
小揚もあるこゝ里より濱よ沿ひ出ゝめて
熟尖海へ三里ゆく半よりく股の歴坂のぞし
再び賀る筆ようつて伊豆の郡往よ建久の昔を
釋し熟尖海なる渡部の客舎よやどりもあ
此里や西北よ屏風の嶺峯建まして冬も
巨樹枝ゝぐ東南無扉ゝ海を開て

裏も圓屋に接ぬよりはるばる遠き大島を彩雲の幕を張るかおぼろく近き初崎の蒲鉾の板屋幾多もあり仲の白帆も天幾摩羅して走る磯乃匂松風浪を隠て躍る兜岩松は常緑搖る鳥帽子宮苔ひくひる毛幾筋ありて滄海巖垂の脚多天工自然の大機関たまぶ編地の御乃富士鏡まうつしとゝぎ繪行掛を

あるまゝ此地は面白き挽物細工の三巡り金環を浴せ中賜しぬ入湯の外なるは白駒の隙幾宮せんも張三本の四さゝもあるべし

よひゝけまぶ羈旅のゆくゝ碑幾濃しを視所閑雲を記し京水が畫圖を加へるの幾いつゝ摯海温泉圓彙と題せり藤井の筆の公忙しけまぶ少漏し見めゝ引ぶし

よう書も多くべし例の拙き筆のたゝびあ

藤もよやどりの草庵に寄る人
詩しるす

文政庚寅七月廿日於
熱海之客舍
京山人百樹 識

天保三年辰秋上 梓 菱販

熱海温泉圖彙

京山人百樹 編

○行程

日本橋よりあたまでの左の了戒畧記也

▲日本橋 ▲戸川 二リ ▲戸川川さき 二リ半 ▲鮫川 一リ九丁 ▲程ヶ谷 ▲戸塚 一リ九丁 ▲藤沢 三リ半 ▲一リ ▲平塚 七リ半 ▲大磯 四リ ▲小田原 七リ 〔あたゝ左〕 ▲曲輪 左りの方は厩小路と云 所谷海手大ら 往来の山ちゝ左一筋にて志ほ所と云 左右ぐハあれどかまち出とゝめらるゝもあり 右ハ切ぐを左ハやきの左ちりも左そぐひろ 四ツ足球進めの所に不案内の人ハ名多ぐし馬 むべ〜熱海道ハ酒食あとと又ゞ海道ハ比〜ゞ ▲早川村 ▲石橋村

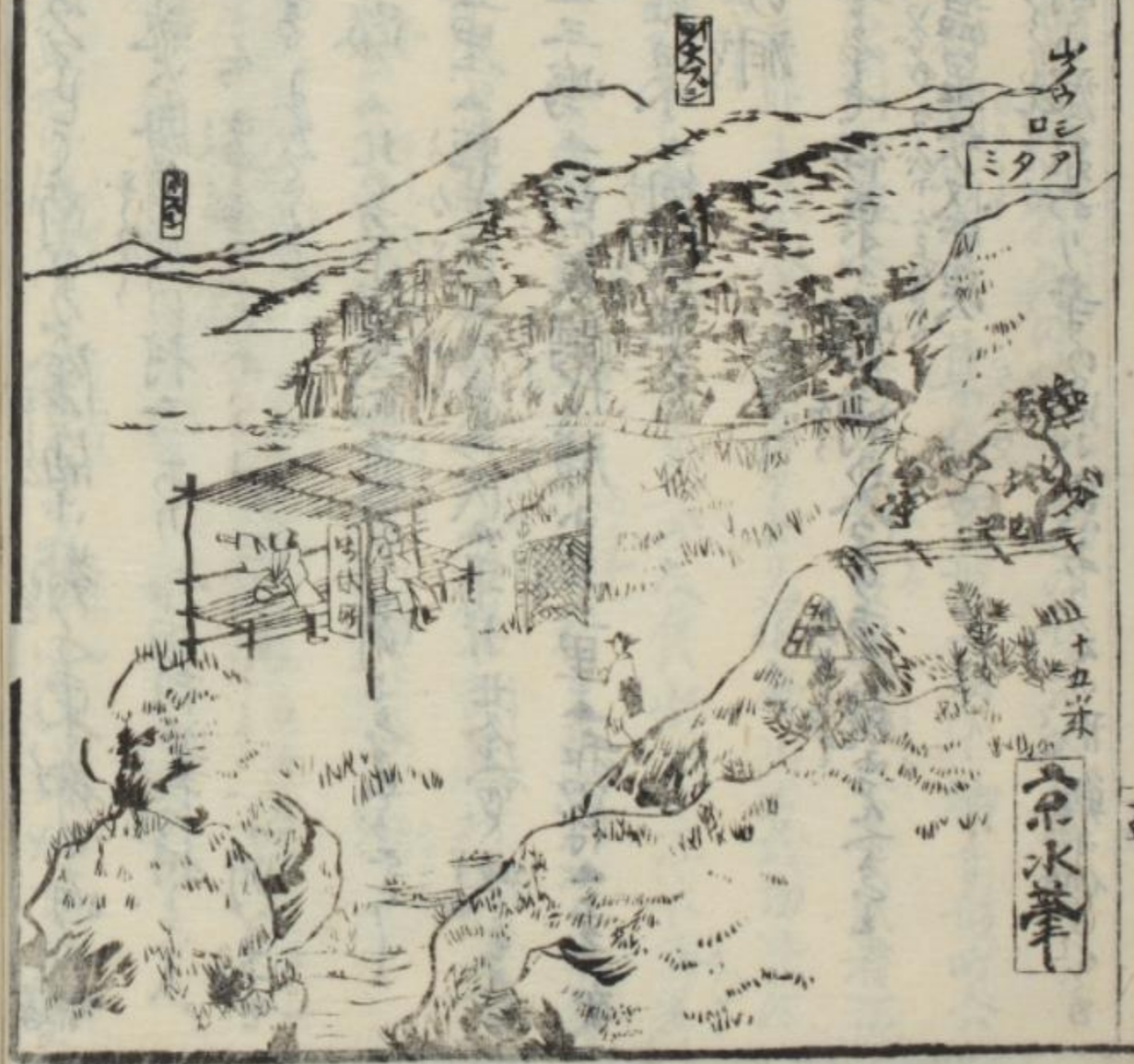
●石橋山のふもとゝ治承四年八月北条大塔の景親と戦ふる古戦場ゝ佐奈田

の与市義忠うくびを従者豊三ハ我死の地とて道のゝとりに墓あり
▲米蔵村▲根府川・御関所あり 禁命箱根に同じ 御番形所人ハ
家主の判百姓ハ村役の判〻・浪人・町医師・剃髪の人・小人ゝどもハ武者仕
人 但門番人を浪人ゝ医師ゝ小人ゝ・武士ゝより根府川に越切ぶた
ゝ乞うたる石垣のかさゝふ多〻▲江の浦 あさゝの左右ハ山つゞき左りハ海岸
ゝ乗べて眺望よし 殊に江の浦ハ絶景ゝ▲赤澤村・赤沢山あり東鏡
曽我物語に見えたる赤沢山ハ武所にあるべしゝ▲河堀村▲吉濱村 三リ 武人
伊豆石切ぶを小巣より程よき中食の立場ゝ▲門河 さらに川あり▲鳴沢
▲伊豆山十八丁・伊豆権現の社殿の傍に在万葉集をはじめ古書多き名所ゝ
○熱海形勝 伊豆国加茂郡葛見庄 江戸より北八里
夫熱海と称せるは上古此地の海濱に温泉あるを伊豆浪城煙に多く熱

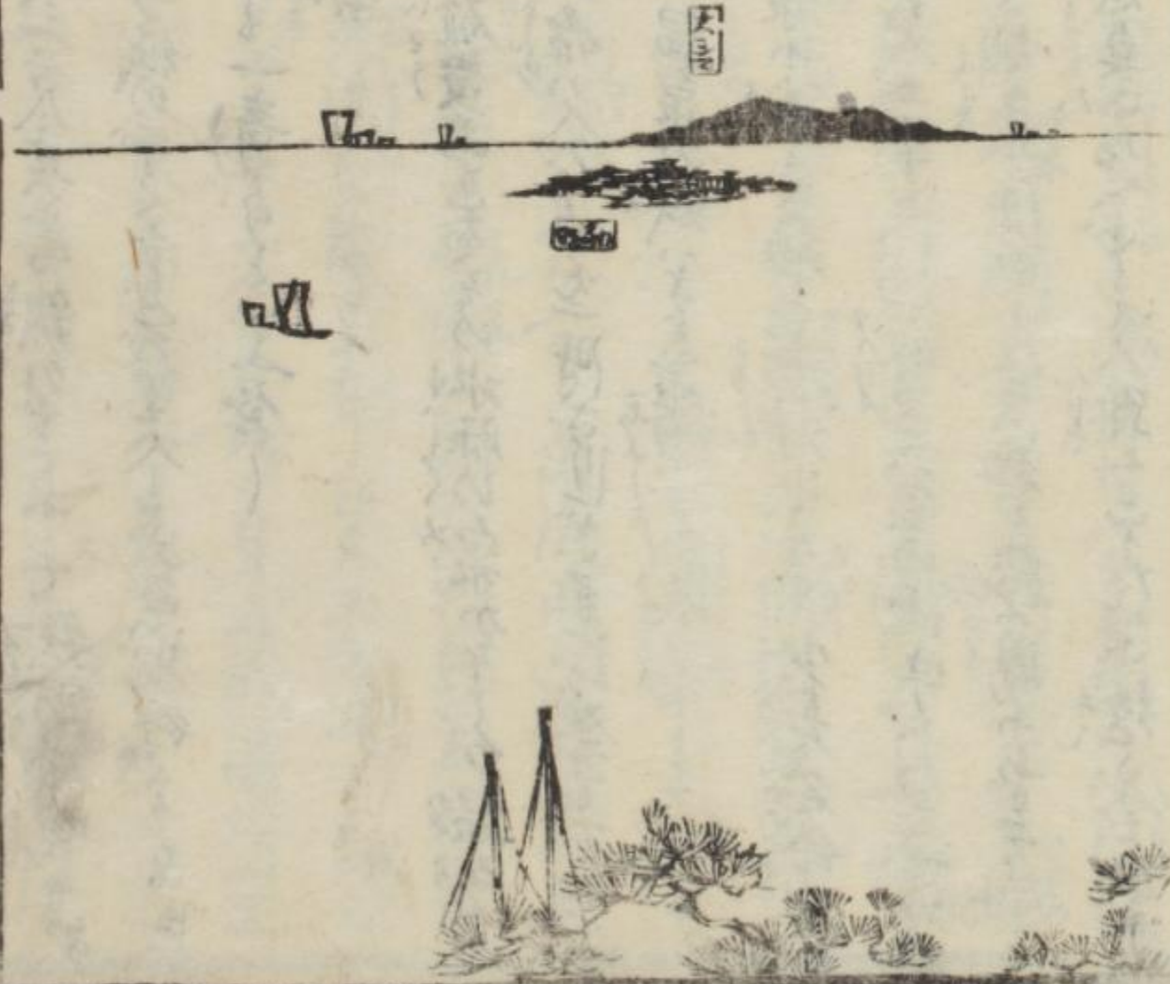
海と名称三面ハ山峨々として南の方 海に對す東部に通ふ船
数澤 城跡過てゝ熱海 海辺の村二ツあり 和田村 義村とゝの
京山あゝ逗留のゝち客舎の主あゝゝの説 一小冊ゝ示せ
下の弾往ゝ生書 ゝふ
○熱海三路 ▲北の方小田原への道 前に記すごとく
▲西南三嶋に赴く道五里 ▲軽井沢 ▲北賀の沢 ▲平井 北条氏 岐こゝあり
▲天土肥 ▲八溝 ▲大場 ▲三嶋 ▲南の方網代浦に至二里 ▲和田 ▲上多賀
▲下多賀 小名 中郷 ▲小山 ▲和田 ▲網代 ゝ
○伊東崎の洞
和田 洞長頼家の命ゝよりて伊東ゝ崎の河に入る東鏡に見えたり
○伊東崎の温泉 奇怪奥
村の中ゝあり その側に温泉あり寺の池に魚あり その形鯉に似たり

江之浦之図

日上紅波
浪裂嶽
瀧来白
浪捲走
沙



幸平菊月霧
あらしあらし陽ハ
つきて不老の菓
秋国喜之意



難病もたちまち
いやめて熟天海
陽垂
そしゃ[illegible]
[illegible]
四谷衛
馬士哥道

鯉あり。大なる事三尺小なるハ一二尺其嵩鍋のごとくふくれて鉄鍋にて煎きるゑ
糸にてきるごとく細にやゝ紙のごとくなれども里人ハ此魚にて得ることあり也
といへ是此池ハかぎりて此魚あるも一奇なるものとなす。

○熱海温泉来由

博物志に安倍ハ尼水源ハ石硫黄あるゆゑ水脈の泉かゝるゆゑ温泉ハ
いふ三秦記ハ驪山の温泉ハ治ハ人分なるを得ざりしゆゑ張衡が温泉の賦ハ
の疾を去るといへ是張衡が温泉の賦ハ諸侯ハ歌見しなり唐土の
温泉故事なし我朝温泉ハ浴して病を療治するの少事名命にも
摧興ハ熱海の温泉ハ人王二十五代仁賢天皇の御宇ハ初
の海ハ温泉忽沸と湧て烟氣海中ハ立ち上り熱湯ハ湧て烟
死る魚の類岸ハ吹よせて悪臭ハ人路をふさぐ為ハ後ハ量霊

を歴て人王三十九代天智天皇の天平宝字の頃箱根山ハ高徳の沙門あり
日ハ方廣経を課る万巻ハいる故ハ人呼で万巻上人と也常場
上昇ハ火焔にて諸の魚集死する大集熱の地獄ハ事とるゆゑ上
人ハ是を見て悲しみ涙ぐく停立て経にて会仏を唱へ
よりて白髪の翁きたりて上人ハ對ひ見のゆゑ此海中ハ温泉ありて
熱湯を吹ゆゑ魚類を焦殺する吾常ハこれをあはれむ
ゆゑ人の万病を治する不思議の霊湯を海中ハ在りもるハ玉と開ハ
おくハひとしきゆゑ仏法の功力をもて上人と是祈いのり此霊湯にて山里
ハ移りて多くの魚類ハ死にまゝ人民ハ病を助るの功徳万業
ハ傳へべしと云てその形ハ消ぬ上人おもへらく是凡人ハ

薬師ぬ来のつげちんと齋戒沐浴し海岸の洞穴を巧食して祈る三日湯殿の夜浪の山く鳴動し海上の波濤さらまきてその音百千の雷のごとくとどろくして海中山上おびやかすちりけれど上人岩窟をいでありたりをみるに浪ろる山の麓に雲のごくたちのぼりかのあり上人怪しみて手水ふいりてみるに玉ふ水山崩て石をあらはし石の間より熱湯湧いづるおりから水沸騰ぬきて地を吐がごとしさて我が念力の満徹して海中の温泉こゝに移りしなんと上人式廟をこゝにうつして薬師を祈念し此温泉に功能あらしめ万民の病苦救助けのためとの誓願立給ひ今いやてあさこの里人の大湯と唱るハ是なり天平宝字より今文政十三年ふるゝて凡千百余年の昔より一日も湯の絶るなきハ実に非変不可思議の霊泉之式説里人の石碑に伝ふ百樹別に考あれど説ふまるべく里

○温泉主治

熱海の温泉ハ関東第一の名湯なれど半バ遊山の地なるを関てこゝ功能詳ふ世ぶる人多けれど其功験なるふ記せ▲中風半身不遂ぶ歩行ふ

まるゝ妙〻▲眼病かすみ目たゞれ目の数ハ七日入湯して目明あらくゝ治まる妙〻▲腰の痛▲肺気▲筋骨▲歯牙▲折鵬▲諸の虫▲寸白▲痔

▲脱肛▲淋病▲喘息▲婦人腰の冷▲懐妊せぶる人▲気虚▲血損▲歯

の痛▲湯にてそゝぬ〻▲腫物▲金瘡式湯ふ入れ初ゝ毒をとる▲その内全く食する

妙〻在ゝれも医療なくして治ゝなれふ妙〻けゞし▲脚服満▲痳病ハ

此湯にて禁〻湯ふ入る間房事なしてきまゝ慎きくこゝろおそるべし

国ふ云文政十三年七月上旬百樹主地ふいるゝ阿部氏の客舎ふやどして

温泉ふ浴しるゝとりふ主の婦人の物語ふ今年春の末三月ハ江

かくいひて家をまかりし時に甲州の人にて西郡の某氏一人の老人娘をぞ中年の
女二人下女二人従者二人を具して宿とりけるが翁のいふやう我は癲気の病ひ
ありしものの娘に癖の病ひありてこの病症此湯に妙なりと聞てはるばる
ここに来りしに去る年此婦に一つの奇病ありし此湯にて治せしが其後
かく保養らくぐにつどひきたり其の奇病といふは六年以前より昼夜眠る
ことあたはず神心労して〜ごとく枯痩食をまもして閑所をこのみ
人に対するを嫌ひ時として心騒ぎて人を罵り弁舌をして狂せるが如
かかる病も此湯の効きなかなかと聞に婦人答ていふ今はやいかにも病と癖とは
此温泉に浴し始めて全快ありし久しく浮気なれど六年の間眠りたるは
がる病を治しけるは聞もおよびしもしかく女の身を医療のみが大概
むかしも聴きしゆつらど眠りを見ざるは気血のそのひのなからんかはいかにや

気血を補ひ枯心をさらずして能く一の功と出ればこれらに浴して
其功能は疲じりたるものもあるべしさはとなりたるはさらにもあるまじとて
翁いひもとて是より其の女に半年余の湯させしに十余日ばかりしてある日
朝食を喰ふ時碗を取とまもて口三口にして頓に眠り持たる碗をおとし
おとしたれども女でりがみればいめんといふに翁かなしく大に
よろこび寝所へ入て即せけるに其日も暮て夜もせがらなく臥次の
朝も同じさめずかくて昼夜三日の間息ある死人のごとくなれば翁にいひて
よろこびにかけて覚束なくおもひし主の婦人も我も猶さきなくのはひかくてかに
かくあれ三日の程は食せざれば飢て病まあしからん起すべきやなど婦人
小間に帰入のいふは六年が間眠りざれば一日を一年にして六百日
内やもしかまじ其のまま甘く眠らせおけとて翁の言ふにまかせて眠

えんぎん上人
万春上人
茅原の
化現に逢ふ
図
天竺
万春上人

万春我
駒牛
ちらちら
いづくの
ちりし
天平の
春東震山
初雪
英泉画

せけるに第四日の夕ぐれより月水さがりて起立四日目よりしたゝるものはまづかまで
今は何時ぞといふ時主の婦人をりふしありて翁に月水をせて七ツ半また
ゆかんといふに女ども来りてさはかられしや六年がほどまで起ざりしがこころ
よく眠りて心ちよげとしたるに久しく夕げたべたりしやほどは是をもて喰物
のすゝむ事あらじとよろこびいざとくと、その家の婦人ふたゝび翁に月水をせし
六年がほどまで物すこしく眠りたまはで粥とまうめのみぞ東方にて下
たてとくめけるに常にまさりて何よくはこしぬるとて給仕する下女にかたる
さまなどいつもとはあらぬ事にて人のうらやましくおもひけるに翁をさきにしおやどころ
たびるかまびすかりし、かくて次第に快く寝食つねのごとくになりて人に面談よくせる
をもと嬉びたるも聞えあるごとく其しるしをあさぬ相客の女もよろこびいひふらせる
になりて三ケ年あまり浴して奇病といひしもまつたく愈けるも翁は

なり妹なるくめ従者までもいさゝかの翁も妹も病はまぬがれぞて
故郷へ立かへりぬとかのくれりは病症のつゞきに江戸にて其の人年久しき
腫物のうれしきにありける者又は他の客舎にて諸病の愈ゆるものあまたなきは
のうちにあるをきゝられどさのみはこゝにのせり

○浴法 ゆあみの方

温泉に浴して病を治するは薬を服するに異ならず。ゆあみは其度にかなへばさまざま功を奏し
しかれども初て湯あみする人第一日は朝夕二度あつきとぬるきとをえらびてすれども初めは
ある日はあつきに入べからず。そのぬるき時まづ髪をそそぎかゝる事をしてから湯に浴をいたす
所ある人は其所をかしなでて熱湯をくまりいる時湯をいそかゝる事をはじめ一両度
ずつと入りてあがるべし。是を一度の入湯とせよ。第二日は食前三度第三日は食後
三度よりも時一度第四日同じ第五日は夜昼六度よりは四度二度第六日第七日同じ

右七日程一ヨハヤといふ一ト廻り出て病ひ動くもあり湯の利るゝ次の一ヨハヤ
出て病程療治し又の一ヨハヤとして病を補ひ気血無程その日支骸を健ふ

○湯味

鹹気あるて苦く甘味ハ微の鹹気とおもゝぐいんとなる里人此湯ふ
多程ひらして木綿を織ふ多の木綿甚ぐつ此湯色猶ふ黒の つ
ゆとゆ〜ふ京山道筋のうち茶の湯ふ用る紫ゆふくさ程此湯ふ浸して
こゝろとしふいさゝらも多のかゝるすゆ程里言の虚たゝぎ程信ぎ湯ハ珍瑰
たゝるゆ水晶のごゝ大便つゝぜる人一碗を喫ふ程ばこゝろよく通ぞとゝふ

○湯潮 ゆのつき

湯の潮ゝと昼夜ふ三度長の時ふ奏潮六ツ四ツ八ツ時年中ふ程遠ふ多の日四十日又ハ
五十日ふ終日佛潮是程長潮ゝ佛潮次の日ハかゝゝぐ湯多日是程休ゝ

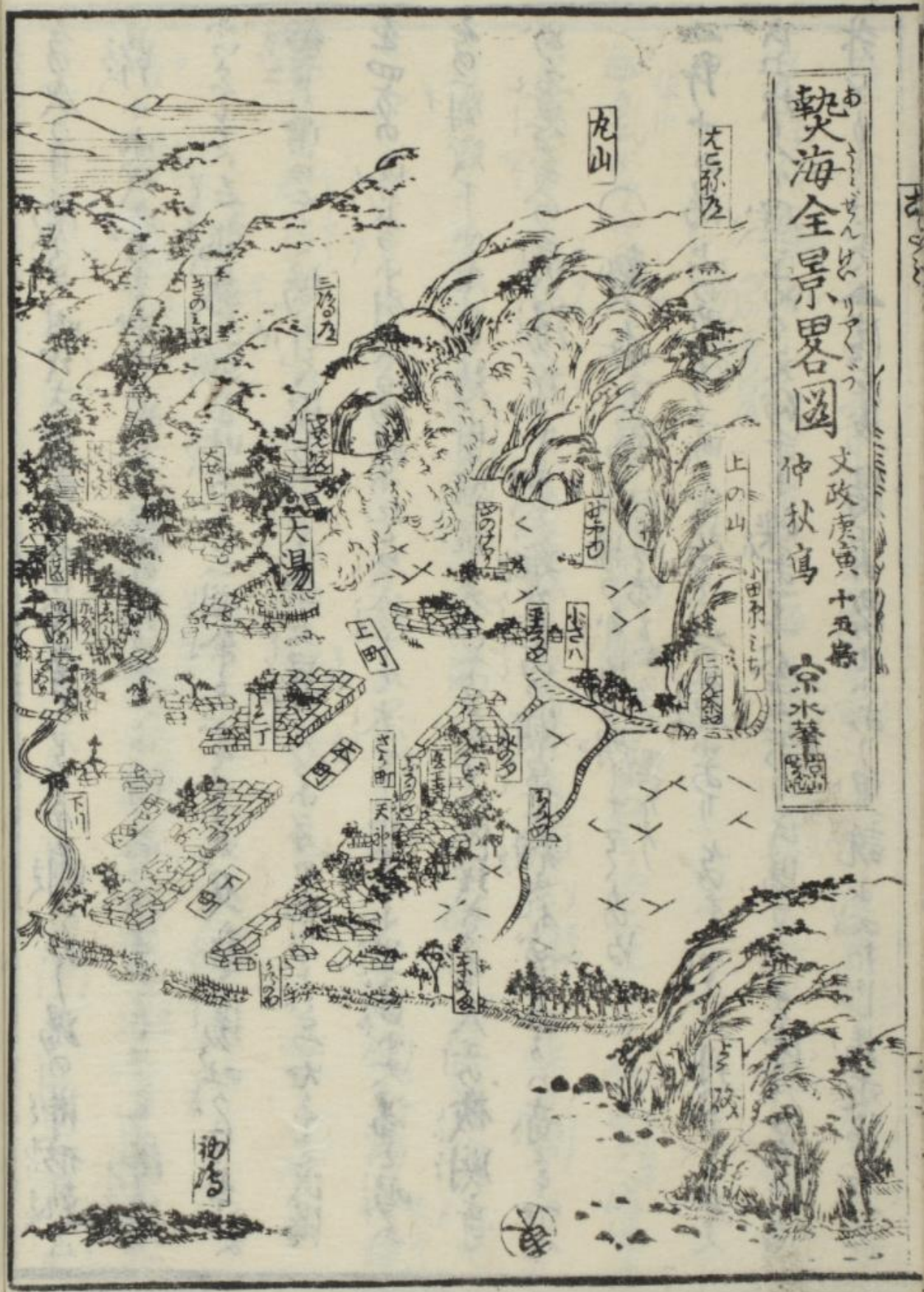
多の次の日湯ゆ程ゝ程ゝ程ゝ程ゝ程ゝ程ゝ前のゆ〜湯の佛形熟ハ
日時ふ程程青ゝぐごゝくゝ此ゝ程ハ鱟の眼のごゝくふ湯ゝで次ゝ才ふてきゝゝち佛湯
ふゝゝゝて石龍熟湯を吐ぐゝくゝ二間余るゝ大反熟湯吐ゝけるあて
郷貴ハ雷のごゝく湯気ハ雲のごゝく天ふ上昇アゝふ才の毛もよぐつぐゝて此湯
を四方の客舎ふ引き湯ゝ程ゝたゝゝ冷て浴せ〜む事ふ里言ふ大湯と唱ふ
多の岡程下ふあゝゝを詰用ふ温泉多とゝゝるかゝるた邑程きゝも天工の機関奇
妙石恩義の霊湯ゝゝゝ唐土雞竜山の潮泉ふ類ゝれゝゝゝゝハ奇ゝゝゝし

○熟海七湯 大湯の湯味もおのゝ異なり

▲野中の湯上の西ゝり一町余北のゝゝ山の麓ふあり多のゝゝの土丹のごゝ〜里人
氏土程ゝて壁をゝる又砂中ふ礫ゝゝて金色あり此湯ゝゝゝ湯ゝ多ふ湯
外をゝ〜けぞ▲ほたゝ馬湯下の町の北ふあり里説ふ云ゝ馬走ほたゝと云

摯海全景畧図

文政庚寅 十五歳
仲秋 鳥



全景
小岡小
尽しがたく
大畧我
まうしのこ

の馬城えせて代湯毒ふ墮て死せり人今ふおそ湯毒ふむ仏清たゆめとと
呼ハあらふまるぐて沸ぎる大ふ呼ハ大ふるきふ〜くとりふ唐土寿
の吸泉の類なるべし▲平左衛湯法華湯ともりふ上町の北ふあり人今の名城
呼ハあらふ廣ぐて沸ふ清高湯ふ同じ唐土茅山の泉手城ばるき又岳
陽の泉人の声城閉て沸き西寧の鼠人の足音ふ聞ぐるくの類和漢同日の
談なりと前ふ人いりと里人ぐものごとりぬ▲水湯本町の北坂町のそと
脉ふ名とるべ〜〜▲風呂の湯水湯の西在家の婦や庭中ふありそのあさとり
三尺ばど本の方の石の間より細流の湯城湧ぐを代湯地気さふ臣ふ分けるや
と名ばけるに代湯と相隣するり僅ふ三尺城さ〜ぐ分ろ〜〜江東縣の泉呉積塘の
湖水半ハ冷ふ半ハ熱ふ〜〜とりふも代湯ふ比ぎれば奇とも名ふたるぐ
▲左次郎の湯医王寺の川ふあるふあり左次郎とふ人ふ庄中ふある西ふ
ふ名づく▲河原の湯下町の東濱のあるふあり

○山　川▲嶋　▲窟　▲石　▲井

▲伊豆山　海の北十八町代山の林麓を過て小田原ふいる▲上野山　海
の東ふあり▲和田山南ふあり林麓ふ和田村あるあるより五町▲念仏山
和田山ふづ〜〜ぐる高巌なり▲日金山あるふの西一里余代山ふと再び登
ニと五六町ふして▲九山ふいくる一名▲十國巌とふ近傍の峯ふ秀ぐる
高巌ふ四方ふ眺望あり五の嶽十の国城一目ふ見る中ふ十五
巌ぐるふ絶景奇観筆紙ふつくし〜〜代山くまづて山躑躅
多し滿開の時ハ錦城ふて山城つくるぐ〜

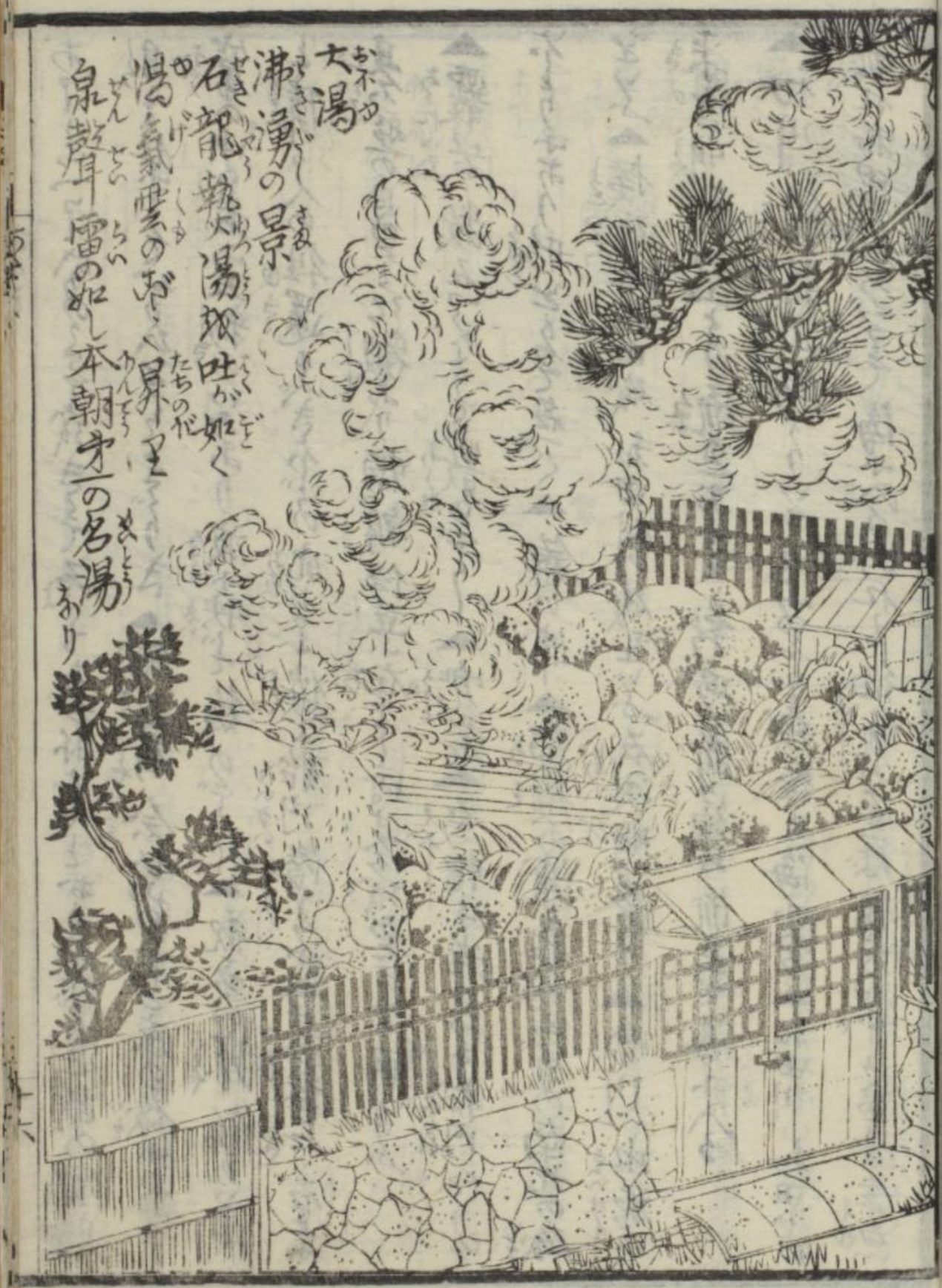
▲初嶋　あさくさより海上三里東南ふあり方一里あまりの小嶋なり　あさくさより眺ハ鮮れ浮らかゝ〜古三のふ沖のふ嶋と称ス　ハ三五一なりとゝふ氏仲のふじま城称ス　新勢の三の後撰和歌集よりさくさより

▲大嶋　あさくさより南海上十八里嶋の中ふ三ツの高山ありて峯より煙りをふるゝ歳間山のごゝ〜熟大海の里人のあのぐふふ氏嶋の人扨時世ふ異る多〜女ハ眉墨そゞ歯墨そ髪墨そふゝ　ふくたれ髪ふして髪さゝをむきびゝられ体巻墨そゝと禮義とも体まきふ貴殘のたびあり絹と木綿を以ていろ近年昌平の女風孤嶋まうつゝて時世の粧ひ学ぶ嶋もあれ共大嶋の女も時世の粧と学さん〜欲されども氏嶋の風俗として賢才の女墨撰て女衆の対ゝ〜ゝべて女風墨同〜ゝこれを俚言ふ女頭と称ふ村中の女〜めかの時世

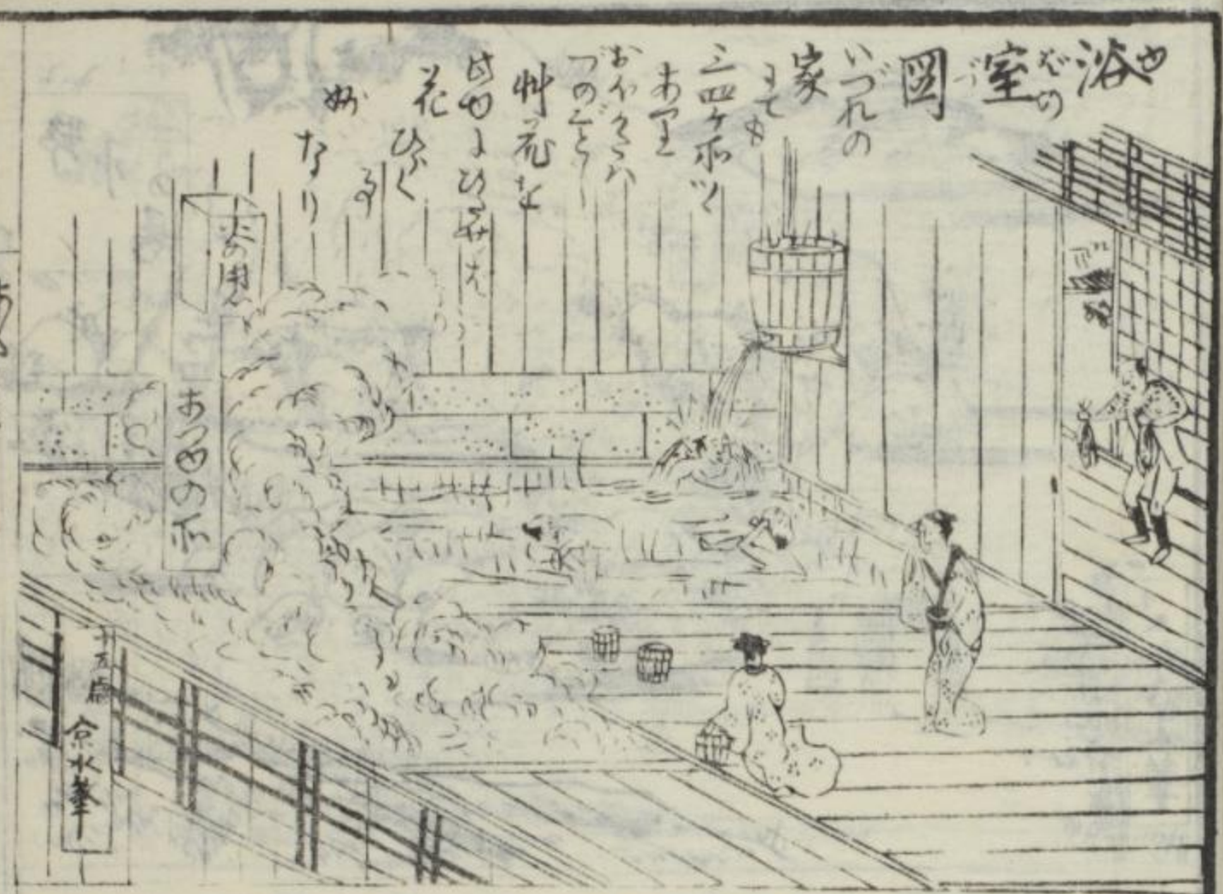
の嶋田の髪ふ出ん〜そまづうの女頭ふ女氏の回ゝ見ゝ。
ゝ〜おもゝじの髪の風ふかぎ〜ゝ〜ゝ〜ゝ　ゝ〜ゝ城ゝゝ今ふ〜ゝ一家の破れ
ゝり一家のゝぶれハ嶋の中の破れゝ見ハ詳〜ゝ〜ゝ今ふたれ髪なりゝ
遠き嶋山ゝゝる賢婦あるハあゝ〜ゝ　御代のゝ〜ゝ氏たれ
髪ふて体巻ゝる女の風俗の古風ゝゝるふ古き絵巻墨アゝゝゝゝべし　他郷ふ
文接ざる洋嶋ゝ〜ゝ古風のゝ〜城存〜ゝゝゝべし

▲鸚鵡石　熟大海の西山城越て二リ半丹那村の山間ふあり〜〜せあゝゝの基
春の氏一家城ゝゝゝてあゝむ石ふいゝゝ石のまゝなる平地ふ種ゝきゝゝゝ酒ゝ
ゝ〜ゝ極て用ゝゝゝゝ歌舞坂のゝゝ城似ゝゝゝ
其技ゝゝゝふあゝむ石ふ郷音ゝゝ人あゝて答ゝ〜ゝ声ゝ〜ゝ〜ゝ毛を
ゝ〜ゝ〜ゝ石の丈ハ六尺ゝゝ幅ハ四尺ゝゝ　石面ふゝゝ孔ゝ〜ゝふ

熱海温泉
湯の原
沸湯の
図
十五歳京水筆


大湯
沸湯の景
石龍熱湯地吐が如く
湯気雲のごとく昇る
泉聲雷の如し本朝第一の名湯

あり　こゝ一ツ　ゆのくさ　ゆきて　手ゝ　もたづ　孫ぢや　とおひしが　逗留の間　臨
時まれふして　ちりひとちらさぐりき　▲錦の窟　会仏山のふもと　東の磯ふあり
窟の中の岩ふ五彩のいろあり　波ふ映じて　錦のごゝ　▲観音の窟　錦のごゝ
と傳る人の往還まべきわゞの穴あり　俗ふ　胎内潛とゝふ　▲碁盤石　石上ふ
碁盤の目のごゝ　凹　敷あり　頼朝　伊豆ふ在ゝし時　碁ふ　此石ふ一所ゝふ
▲叢岩　数石つなりて　叢のごゝ　▲兜岩　▲烏帽子岩　共ふ　胎内くぐりの
ゝとりふあり　形をゝて名づく　▲錦の浦　▲那須の浦　胎内くぐりの　南北の磯
をゝふ　▲接磯　▲和田磯　和田村の磯をゝふ　石決明　多ゝ　▲糸川　此源
来宮明神の山より　流れあさゝ　新宿　此流れて海ふ入る
▲初川　蓑口村　山間ふ　ゝでゝ　此山ふ　ふもとふ　此流れて海ふ入る　▲和田川　和田山より
流れ和田村をめぐりて　海ふ　ゝ　細流　多　此流　架　ゝ　ふ　魚



多ゝ　▲業平井　あゝ　形　窟ふ　あり
石の井筒　ある　多ゝ　此来手の磯　ふ　ふ
ゝりて　名づくゝふ　▲三熙井　温泉寺の
門ふ　あり　三熙の故　ふ　雲居禅
師の名づくゝ　ふ　ふ　一の名水
たゝ　ふ　此　ふ　貴人　多ゝ
式井　此用ひ　ふ　雲居禅師の傳　温泉寺の下ふ　此
▲多賀一杯水　会仏山　此越て　和代村ふ
ふ　山径の側ふ　あり　周り　僅ふ一尺余の
小泉ゝり　冷ゝ　水のごゝ　清徹ゝ
ゝ　水　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

此地我過比時湯水のごと太刀洗ひて
山城うぢちうしゃと此泉我湯いさせー
とと小泉ゐ五ぐ多いくゆどの炎赫うと
亂るゐ紀名水之

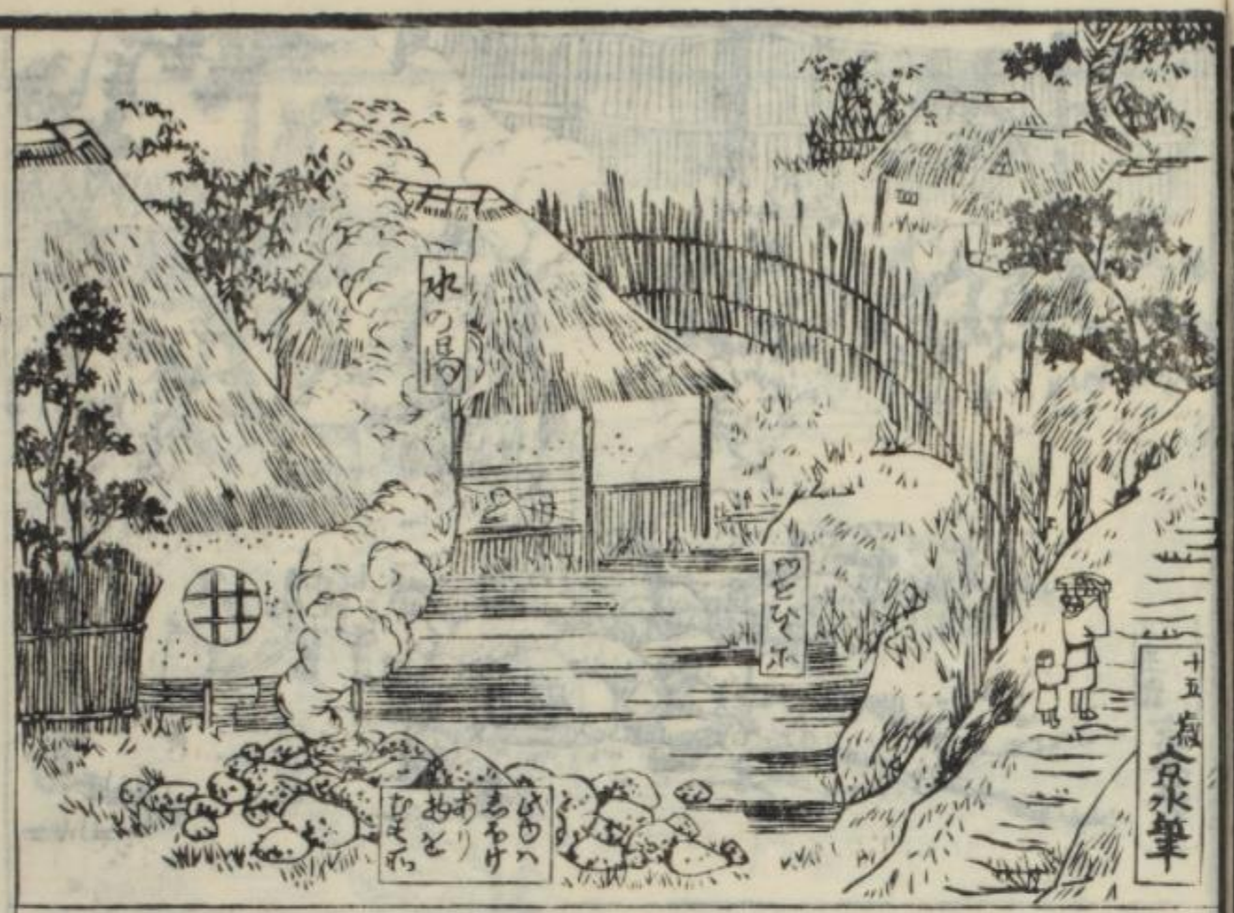
○神社

▲湯前權現 上町うり一町余西ゐ在
祀る所 少彦名命鳥居の傍ゐ碑
あり明和七年社人の建所之文ハ信
陽原通 魏書ハ東江平原鱗ゐ
千百余年ゐくね湯泉の起立をゐるして
天平勝寶元年己丑月少名彦

神憑童曰とゐ文あり又慶長中
□祖のゐ水ゐ湯ーゐ寛永十年
畝廟ゐ將ゐ湯ーゐ兄と命て行殿
我構ゐふ遺跡及調馬場尚存の文
あり石燈籠西基宝暦八年夏久留
米の大守ゐふ湯ーゐ時の御寄附
なるゐ彫ゐ石鳥居安永九年の秋
大守再び湯ーゐ時の御寄附ゐと
毎年九月十日ゐ祭礼ありゐ神夫ある
ことハ里人の口碑ゐせづりてゐふもどせり

▲今宮明神 秋田村ゐあり祀る所と

ゆゑのせり ▲天神の社本町より西の方四町余ゆきすぎて海辺ゆ社あり しゆ一せ遠浪ありて社流しなる尊体木作なれども破ゆそぎりてろづれさしゆ社我今の地ゆ移しとぞ今ち東都の人は地ゆ逗留のうち氏神を信じて感應を得るるのありて財をゐじて社を補ひけるゆ来歳歴て神祇の博士ゆ来りゆ多ありて当体我拝して大ゆ敬我ゆ如し菅公築紫ゆ謫居ほく なるゆ多く真像七軀を彫刻ありて



海ゆ流しりゆ六軀八流を傳る而 事て手て真体を祀る所の宮今ゆ 在り其一軀いづれの地ゆ漂流せ やさざるるざりしゆ式当像を七軀の 一ツて菅公の神作なれと称奴りけ ゆ社人大ゆ驚るある傳へ六ツもおよ さざれば何人の作ゆやと申ゆ式ゆ 菅公の神作ゆ式社むしへ海 のれとりゆおしゆ式ゆ海辺ゆ流れ どまるゆ式ゆ式ゆ式ゆ式ゆ式ゆ式ゆ式 一ツ人と見より里人ゆ信をまして

宮殿とも重修りるこそ

▲来宮大明神　湯おの社の西南ぞかり山の上ふあり熱海の鎮守なり傳ふ曰和銅三年六月十五日あさこの里人網地もとて尺ばかりなる木像を得り奥ふまくざるぞ海中ふもてしふ三度まで網ふかりしも多大ふ怪こる者の上ふ棄記しふ和田村の農夫今来宮の社宮青木氏の先祖なり古五拾ひとりて家ふ持ふしふ生家の童ふ神の憑てのふやうこれ五十猛の命〳〵〳〵海中ふおりしが叫いこそて

出現せり此地の北の山ふ七株の神あり て潮の声別ぐる所あり其地ふ我をまつるべし永く村民と法護し温泉ふ浴せ給ふのくためふ恵ぜさまて灵湯の病ふ癒ぜしる我まつるべしと神託ふよりて今の所ふ祀る自来りの人とふ心ぞ来宮と唱へなる毎年六月十五日の夜あさこの浦ぞとり いる魚我供し十六日ふ神輿我廣田の御旅所ふ移して祭ぞあり

今の神宮青木氏の初祖ふ木の宮の

祭礼の時神輿の上ふ造りする孔雀ふ
稲穂玉含せるもあり此稲穂あさミの
上町の北ふ住せる百姓平左ゑ門が田のうちふ
て刈ける稲の古根より一茎玉生じて
実るる毎年祭礼のけとたゞ一とを
かれが田ふ稲玉せるぜいるるもすふと
久くいぶるしふかの稲とせるゞ田の隣
ふ石玉つゝて田の畦ぞとする隣おきる
石の間より稲玉せしして神僕とせしふ
その月の末ふ平左ゑ門が家ふ不幸あるが
次の年ハ再び平左ゑ門が田ふをせるせしぞ

此一摩ふ於ても神灵の赫くしる玉あるぞし▲伊豆權現あさミの北十八町
小田原いろ〳〵のかさゞふ鳥居あり走湯山東明寺と云別当玉般若院と云
十二坊あり昔八今ハ廣大ふ社ありるハ東鏡ふ詳なり●拾遺
●扶木●松葉●哥枕名寄ふ古ふの玉ある田跡ゝて神灵のあさミるハ
書く人の考ふ之▲古ゝ井の社伊豆權現の西北ふあり古ふの田跡

○寺院

▲大乗寺 日蓮宗 あさゝ上町の西ふ町ふあり此寺ふ日蓮上人自作の木像
あり傳云上人伊豆へ左遷の時四十二歩の木像玉刻ゝ玉ハ玉寺ふ傳ふ又
上人真跡の曼多羅あり信仏の人稀見玉ハ祈ゞ許して稀ふ
▲海蔵寺 妙心寺の末 上町の南三町 開山悟庵和尚 中興潭渓和尚
▲温泉寺 妙心流 上町の西三町余 傳云 文治五年頼朝の創構

本尊の觀世音は弘法大師の作脇士の地藏昆沙門は運慶の作と云中興
開山授翁 和尚は南朝の賢才万手小路藤房卿と此地に遁居て桑門に
入て授翁と号して此寺に住しめ興禪寺も兼住し自画の像あり寺の庭中に
授翁自栽の松今にあり 授翁飯洛の後 敕によりて妙心寺二世に住し
又寛永七年高徳の少へたる雲居禪師此地に錫杖を温泉興禪
の西寺を兼住せ是より近世の盛衰とも禪師のちに奥州松嶋の瑞岩寺
に再住入寂して大悲圓滿國師の謚號を其傳の詳なるは元文三年の
刊行雲居国師年譜にあり 百村あさくに逗留の間に武書を温泉寺の児住に
借用して一部をしに雲居国師を開山或は中興とする寺
百七十三ヶ寺あり そのほかのたきとまろびし夜房々のかちまひし
衆僧衣袂殺温泉寺に伝ふ一説せしに唐あるして稀世の珍器
▲誓願律院 上町の西 縁起を少めせり ▲青玉寺 縁起をぬけり
▲興禪寺 秋田村にあり中興開山万手小路中納言藤房の遁授翁大和尚

寛永年中雲居 慈光不昧禪師住職鐘の銘に前文略 寛永十癸酉
年小春良辰大檀那執伊両国太守藤大覺寮朝臣高次公治
三嶋居住齊藤右近尉正俊 前妙心雲居叟希膏誌とあり
熱海の里人某の話に雲居国師此寺に住職あり国師奥州松
嶋の瑞岩寺に住職在り対心に欲せざるありて瑞岩寺を逐電し名を
隱して行脚し此地に入偶て興禪寺に寄食し賤き勤を臣て居られ
一日門前の草を刈て居られ国師の茅子天びれ一寺の住職を
を保養のため此地に入偶し勝景を愛たんで興禪寺の門前を過て
国師を見て大に驚き立地地上に跪居て国師の名を呼びて来錫の
所以を尋ねる孫は此時興禪寺の住持門つなぎと名乗の上にありて是
を見て已に行脚の僧とは思への雲居禪師とあとはと大に驚き直

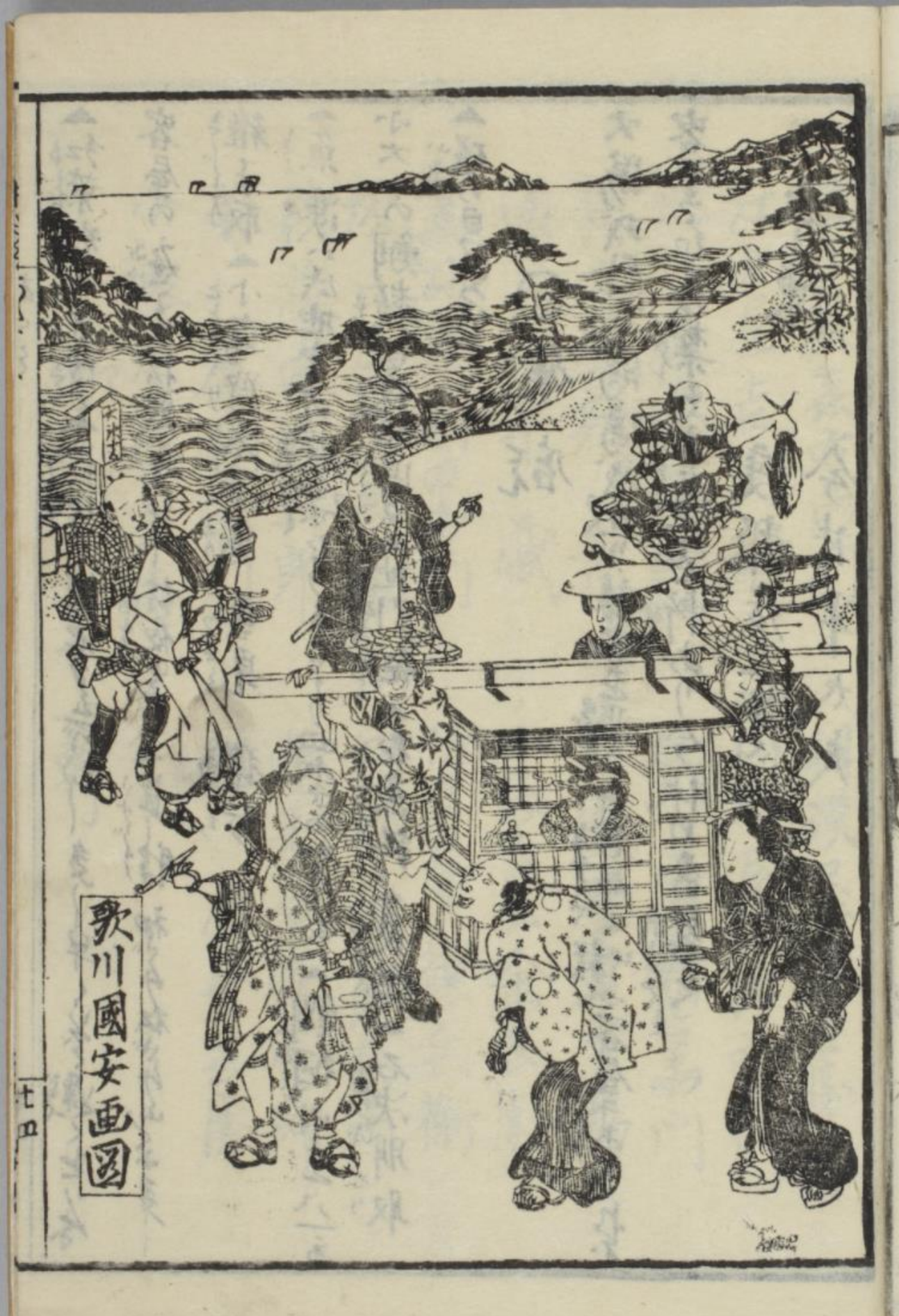
本堂の壁に詩歌題して住職歌雲居国師に譲り裏門より西へ行
きぬるに俗に温泉寺の藏本雲居国師年
譜歌人に成る紀して詳なり▲渭河原地藏　温泉寺の西に
あり▲和田地藏　和田村にあり雲慶の作とぞ▲土沢地藏　上田の西廿一丁
▲月金地藏　鋼伝之　あるべの西へのぼること五十丁ばかり霊験あらたなる
きくたれどもるまけれども畧す▲峠の地藏　縁起歌ばかりなれどもすべ
畧す　月金山の峯つづきにあり氏堂より西南の滄海眺望に景色絶
妙熱海近巌の勝地なり●此余あまた近隣の旧跡少からずしるも多る
べし　好事家の補訂歌まつ

◯産物　こやげあ

▲挽物細工　桐の木茶ぶい　脂硯のふい箱小鉢のふい茶器夏目香合
のふい▲ぬりもの細工　重箱　ぶり吸物のふい盃ぶい盆のふい●在ぶれも旅
客逗留のうち好に寄せて作るものより出来品あり▲雁皮紙　今井
半大夫家制　栗山先生の創意にて造りそめ依て雅品多し
▲木の葉形塩温石　あるべの湯の気にて自然にできる故に依て方病に
▲大湯の格詰　温泉に三十日ばかりひたしたる格詰たくさんお記て是に大湯のつと
たる成つる一格の代銀拾匁も訳なく成て江戸日本橋にいる▲魚類の乾物
私の通ひ自在なれば暑中もいたにふかいる▲青木の箸▲あるべの絵図

◯遊楽　旅客逗留中のなぐさめ成事

▲碁盤象棋盤　半に客やあり▲琴三味線鼓大鼓▲茶の西洋具もあり
▲俗ごと成る借本▲借本▲掲弓之巻　春　山くの花見▲厳とり▲青梅
▲汐干狩　夏　蛍狩▲賓客の網涼▲破蓮び　秋　鮭つり　糸川　和田川　初川


歌川國安画図

客屋湯の図
あらい海
町家
客亭
えの
光り
景

▲紅葉狩▲麻吹▲虫干吹　暖地なれば虫多く早くそぐ遅くとり来
客屋の座敷松虫鳴く　終夜鳴く▲茸狩　初ぐみ松ぐみ山くみ多し
雑子取▲小鳥狩　冬　千鳥　雪見　猪打
▲魚漁八代地方一の遊楽なりとより四季ともかろ毛▲鯛網　付とて八二五
小大小の網数百枚或得り▲地引網▲松魚釣▲長縄▲石決明取
▲磯の目ひろい

○旅店

大陽或引て渇塢或造り旅客を繁る客屋と唱ふ客屋千あまりに
客或ぞむ或禁ぞ客屋三十七軒あり今休のあの畧之

本陳　渡部彦左衛門
今井半太夫

畳土屋　玄右衛門
江戸屋吉兵衛
巴屋次五兵衛
鈴木屋新吉
遠藤屋平蔵
真砂屋利右衛門
坂口屋弥兵衛
武蔵屋五郎
菊屋孫右衛門
小澤屋與兵衛
通計二十一軒

相撲屋要右衛門
山田屋八郎右衛門
紙屋新右衛門
三浦屋平助
小畳土屋金兵衛
伊豆屋徳兵衛
伊勢屋五郎右衛門
蓬莱屋伝三郎
鱗屋平兵衛

旅客やどり残りしの事ども食る残物ハ一まハり七百の食料ニ三人まへ金百疋湯料として限ある以外定ハ自分ニ成ハ
とぶらひ食料よりづの糸帳面ニ書ちらしてをる家あり加ゑ
だゑ水挿の糸庫麦毎ニ有りてる残かくるの臣かけ合ふれとらて
自在残るも殊ニ清水之世人城召具せざる人自分まるひおせんと
出ニ成ハ備女おりて朝ニ来りて夕ニかゑる食る残洞ニ馴て信実
ニ仕ふる三人のごとし米ニ付る婦人ニあらぬ代備とせも
夜具雑器の類ハ損料ニて其ニよりかて遊藝の具もる残くるる色
座敷料ハ有るよりもあ〻ば滞留の日数旅客の多ニよりて
心ある事一▲あるよりハ小田原近りなる籠一挺ニ百羽と定ニも
人ニ一人之ニ羊ニ▲村中の人物まで老実なるハ山村ニ世界とまして和藤
花美ニ後ニ成る四名たるべし〻藝海湯治ニ来者後のうち
出て遊山ニ閑出る走の雑夢ハ左ニ記るごとくなれば
病ある人医療の夢成ちぶ〻て其温泉ニ浴し長命を楽む
べし其温泉ニ名四方ニつる中ニ功能詳ニ成る人多
ければ上梓して大方ニ示さんとまるハ編者の老婆心なり

文政十三年秋七月ニ於藝海客舎一色亭下之
旅囊採華

山東庵京山 涼山

藝海温泉図彙大尾

C238
新
14

画図

岩瀬京水

仝

溪齋英泉

歌川國安

備書

浴槽舍楓川

天保三辛辰秋 江戸馬喰町二丁目

上梓業元 山口屋藤兵衛板